

<全体分析>

試験時間 75 分

解答形式

論述・計算が中心で、空欄補充・記述・記号選択などが含まれる。

分量・難易 (前年比較)

分量 (減少・やや減少・変化なし・**やや増加**・増加)

難易 (易化・やや易化・**変化なし**・やや難化・難化)

出題の特徴や昨年との変更点

すべての大問に論述問題があり、字数指定の論述問題が大幅に増加した。計算問題は、煩雑な計算を必要とする問題はなかった。

その他トピックス

例年では平方根の値は大問ごとに与えられていたが、本年は科目冒頭の注意事項に与えられていた。

<大問分析>

番号	出題形式	出題分野・テーマ	範囲	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)	難易度
I	記号選択 記述 論述	地質・地史, 岩石・鉱物 (ルートマップ)	地学 基礎 + 地学	問 1(1)図から地層どうしの関係の名称を答える記述問題で、易しい。 (2)図から走向を読み取る記述問題で、標準的である。 (3)図から傾斜を読み取る記号選択問題で、計算要素が必要で標準的である。 問 2 鉱物と組織から岩石の名称を答える記号選択問題で、易しい。 問 3 図の堆積構造から上下判定について論述する問題で、制限字数内でまとめるのに時間を要するため、やや難しい。 問 4 地学的な時間スケールを問う記号選択問題で、詳細な知識を必要とするため、やや難しい。	標準
II	計算 論述	固体地球 (地震)	地学 基礎 + 地学	問 1 図から発震時を求め、その理由を問う論述問題で、受験生が見慣れない図であるため、やや難しい。 問 2 震源距離、S波の到着時刻、初期微動継続時間とP波の到着時刻との関係式を求める問題で、やや難しい。 問 3 地震波速度の比を求める計算問題で、問 2 の結果を用いるため、やや難しい。 問 4 問 2・問 3 の結果を用いて S 波の速度を求める計算問題で、やや難しい。	やや難

III	記号選択 記述 論述	大気と海洋 (大気の大循環と地球上の水)	地学 基礎 + 地学	問 1 大気大循環と塩分に関する記号選択問題で、基礎知識で解けるため、易しい。 問 2 熱帯収束帯における植生を問う記述問題で、基礎的な知識で解けるため、易しい。 問 3 南北両半球における蒸発量の違いに関する論述問題で、海洋の面積比という地理的な要素を必要とする標準的な問題である。 問 4 水蒸気の輸送に関する論述問題で、偏西風や季節風などが熱の輸送にかかわっていることをまとめる論述力が必要となるため、やや難しい。 問 5 水収支に関する論述問題で、やや易しい。	標準
IV	記号選択 記述 計算 論述	宇宙 (恒星と惑星の運動)	地学 基礎 + 地学	問 1 (1) 天体までの距離測定法を順に並べる記号選択問題で、基礎知識で解けるため、やや易しい。 (2) 遠方の銀河の距離測定に関する論述問題で、標準的である。 問 2 (1) HR 図を利用して恒星の進化の順序を並べる記号選択問題で、基礎知識で解けるため、易しい。 (2) 恒星の寿命に関する論述問題で、標準的である。 問 3 太陽スペクトルに関する記述と論述問題で、基礎知識があれば解けるが制限字数内でまとめる論述力が必要となるため、標準的である。 問 4 ケプラーの法則に関する計算問題で、公式を知っていれば解くことができ、煩雑な計算も必要としないため、やや易しい。	標準

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

記述対策としては、教科書に太字で掲載されているような用語を確実に覚えることが必要である。論述対策としては、重要な地学現象に関して、メカニズムをしっかりと理解し、少ない字数で素早く要点を的確にまとめることができるように、練習することが大切である。計算問題の対策としては、様々な分野から出題されるため、公式だけではなく、地学現象と計算が結びつけられるような部分を、過去問などで探して、問題演習をしっかりとしておくことが重要である。また、教科書などに掲載されている図や、実習・観察のページにあるグラフなどを実際に自分で描いて、結果や考察をまとめる練習をしよう。

地学は問題集が少ないため、過去の共通テストや二次試験などに加え、オープン模試や全統記述模試なども活用して学習していこう。